リーフデ号漂着地シヤチヴイ「XATIVAI」の論証

宮下良明
（会員　佐伯市古江）

世界航海史上の中で起きた重大事件の一つに、オランダ船リーフデ号豊後漂着（一六〇〇）がある。想像を超えた悲惨きわまる姿で、豊後の港シヤチヴイにイカリを降ろしたという。

その航海記は、徳川家康の外交顧問となったイギリス人ウイリアム・アダムス（日本名：三浦按針）が未見の同胞と、本国の妻宛に送った手紙によって、如何に苦難な航海であったかを知り得る。

漂着地住民との会話の中で、住民が教えた地名を彼等は自国語XATIVAI、すなわちシヤチヴイなる文字にして報告したものと思われる。

そこで第一投錨地、シヤチヴイ（当時耶蘇（やそ）会の史料亜細亜誌）の考証と、当時の佐伯領における時代背景並びに佐伯湾岸漂着説から、臼杵佐志生漂着説の成立まで自論を述べてみたいと思う。

日本歴史年表に不滅の一頁を残した、リーフデ号漂着地の研究は、故村井強氏が佐伯史談第一四八号から一六二号迄に論述され、研究者のよき参考資料となっている。この後、氏の後を受け継いだ研究は後世の歴史家によって解明されるものと想われる。

史談一七九号で佐藤事務局長が、氏を偲んでリーフデ号漂着記を発表した。後述する拙文と重複の点も多々あろうかと思うが、内容を理解して戴くため、敢えて記述した。御了承頂きたい。以下私見によって漂着地考を論じてみたい。

(一)　岡田章雄著『三浦按針』とは

これまでの歴史刊行物で、リーフデ号佐志生漂着説を結論付けたのは右の著書とされている。そこで、『三浦按針』が出版された、昭和十九年頃の日本の状況を振り返って見ることにする。

（イ）六月十九日、マリアナ沖海戦に惨敗、航空母艦潰滅（かいめつ）。

（ロ）七月七日、サイパン島陥落玉砕。
（ハ）十月二十五日、比島沖海戦、特攻隊出撃。
（ニ）十一月二十四日、B29に東京が初空襲される。

当時の佐伯湾は、連合艦隊集結港・潜水艦訓練港・人間魚雷基地として軍に占拠され、陸部には航空隊・防備隊・憲兵分遣隊等が置かれるという重要港湾であった。このため汽車の窓は鎧戸が下され、彦岳等豊後水道が眺められる山々には官憲の目が光り、迂闊にはものの云えない世相であった。

このような状況下において、岡田章雄著『三浦按針』は出版許可されたが、当時の出版物は総て当局の許可を必要としていた。『三浦按針』に対する査定番号が「一ノ二二四智」とあるところから、岡田氏は佐伯湾機密地帯に筆を入れることを避け、北緯三十二度半土々呂沖でアダムス達は四月十九日陸地を発見し、その日の内に臼杵湾内佐志生に漂着したことになっているのである（三浦按針書第二章、十七頁）。つまり、当時のリーフデ号の速力では、日時を要する距離を一挙に短縮していることが分かる。

二　岡田教授と鈴木アナウンサーの対談

リーフデ号佐志生漂着説を発表した岡田氏とNHK鈴木アナウンサーとの対談（昭和五十二年）の録音テープを汐月史談会長が書き止めている。

それにより岡田氏が、シヤチヴイと佐志生を結び付けた自説の声を次に紹介しておこう。後日の参考になると思う。

岡田教授＝シヤチヴイ、これがどこか判らないかと思って、色々尋ねたり臼杵の近くをずっと海岸線をこの地図でたどったところが、幸いこれは恐らく佐志生、この所じゃないかというところで、これは私の推定ですけれど、この推定が結局、後に臼杵の方でも受け入れられまして、その佐志生に今では立派な三浦按針の記念碑が作られています。（以下略）

この鈴木アナウンサーとの対談から察すると、岡田氏自身臼杵に立ち寄った形跡は感じられない。また、アダムスの手記「豊後の王」なる太田一吉（後述）の所領は、臼杵湾以南は蒲江まで支配下であった。したがって、シヤチヴイという地名を地図で捜したことも納得がいかない。

以上の如く岡田氏は佐伯湾・津久見湾の所在は念頭に

なく、最初から臼杵湾佐志生有りきの想定で、鈴木氏との対談に臨んだものと受け取られる。

(三) リーフデ号と太田一吉

航海不能寸前となったリーフデ号が、慶長五年(一六〇〇)四月十九日、北緯三十二度半に於いて陸地を発見した。それは延岡市土々呂沖に当たる。オランダ出港当初百十人中、残った船員二十数名の喜びは頂点に達したものと思われる。翌日、豊後の地一里(リノ)沖にイカリを降ろした。多数の小舟が漕ぎ寄せ、貨物を略奪された。

次の日、同地の王は兵卒を我が船に遣わした。二、三日後、リーフデ号は良港に曳航され上陸を許された。

以上「慶元イギリス書翰」によるアダムスの手記である。豊後の王とは時の臼杵城主、従五位下太田飛騨守一吉をいう。尚、良港とは勿論大友氏以来の臼杵湾を指すものと思う。

一吉の事跡については、村井氏の寄稿、史談十九号・一四九号に詳しい。

関ヶ原合戦後一吉は失脚、同郷美濃国の大名稲葉貞通が臼杵城主として一吉の後を継承した。当然佐伯領も毛利高政の入封する迄、稲葉氏が支配したことになる。(慶長検地帳・大分県地名大辞典)

いずれにしても一吉はリーフデ号乗組員の上陸を許し、食糧を供給した温情豊かな豊後の王であったのである。

(四) 鎌浦洋和著『オランダ船リーフデ号 漂着地考』から

右の漂着地考を拝読した感想は、鎌浦氏は内海航路の水先案内人で、豊後水道・瀬戸内海航路の専門家のようである。その中から氏が揚げた問題点を抜粋してみると、

一、アダムスの緯度測定は計器によるもの、また日数の計算等も信頼してよい。

一、北緯三十二度半(土々呂沖)で島影を見た。其の時北西(芹崎・鶴見崎)に舵を向けたと思われるが、接岸可能な泊地は大島を過ぎるまでない。日暮れになれば尚更と考える。

一、翌日投錨したその泊地は、佐伯湾奥部(シヤチヴイ)の港であった可能性が最も高い。

一、臼杵湾の場合有り得ないことではないが可能性は少ない。自航能力一ノット前後が限度のリーフデ号では、更に一日を要するものと考える。

以上、鎌浦氏は豊後水道域の略図を掲載し、詳論している。また、どうして豊後水道の最北に近い臼杵湾佐志生沖まで北上したのか、不思議に思っていたとも述べている。

正確を至上とする水先案内人の見た漂着地考は、十分な説得力が感ぜられる。

(五) リーフデ号船尾像エラスムスについて

リーフデ号の船尾に西欧の吉利支丹聖者エラスムスの像が飾られていた(国指定重要文化財)。この研究は多くの学者によって全貌が明らかになり、一躍世界の注目するところとなったという。

この像は、栃木県佐野市の禅寺「龍江院」に納められていた。世に問うたのは大正時代、丸山瓦全という足利の郷土史家である。その調査によるとリーフデ号は、慶長五年、太平洋上で暴風雨に遭い、佐伯湾岸に漂着したと言い、昭和五十一年、佐野市教育委員会発行文化財篇の解説文になっている(詳しくは一五四号エラスムス像は語る参照)。

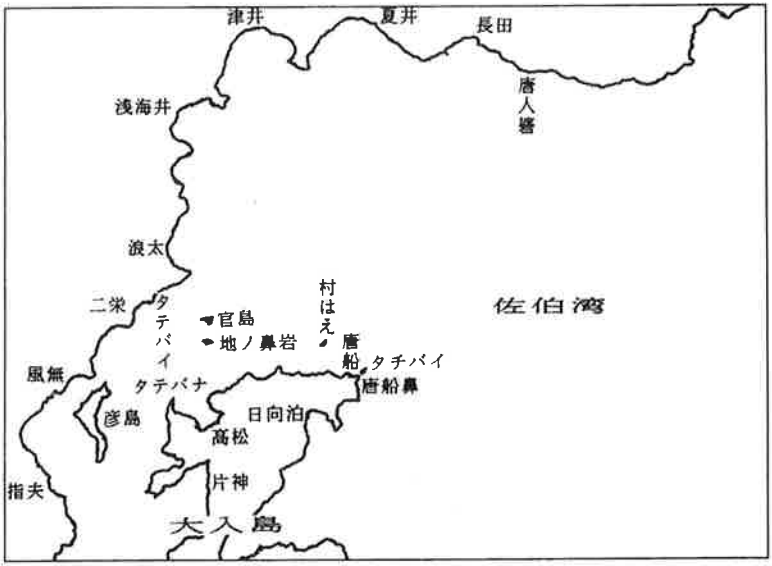
いずれも鎌浦氏の漂着地考と共に、佐伯湾岸漂着説の傍証になるものと考えられる。

(六) 佐伯湾漂着唐船碆の考証

唐とは中国古代国家の呼称であるが、明治以前の人々が唐人お吉とか毛唐人、また、ポルトガル船を指して唐船と呼んでいたのは、広い意味で外国を指した総称をいう。

刊行『三浦按針』の中で岡田氏は、シヤチワイ即ち佐志生であろうと推定した。しかし、これを否定した村井氏は、指夫沖一里唐船近海が漂着地点であろうという新説を立て、佐伯史談で発表した。筆者も唐船漂着説に同感する。以下、更に唐船説を煮詰めてみたい。

去る平成五年七月、前述の唐船地帯に佐伯市によって、花崗岩製重量約二十屯の豊後白水郎の歌った萬葉歌碑が建立された。その時に語った地元日向泊の古老いわく、シヤチワイはタチバイの事ではないか、それなら昔から呼んでいる唐船の右手の岩がそれであると指差した。その時は残念乍ら話題にならなかった(略図に示す位置にあり)。



(七) シャチヴイの港論証

シャチヴイの港なる文言について、少し述べてみたいと思う。

四百年の昔、湾岸住民が耶蘇会側に対し、どの様にリーフデ号漂着地を説明したか不明であるが、報告を受け取った彼等は、シャチヴイ(XATIVAI)と亜細亜誌に書き留めている事実を見ると、おそらくそれに近い発言・発音であったと考える。したがって、語源はタチバイが最も近い。岡田氏はシャチヴイを地図の上で臼杵湾をさがしたら佐志生があったと言っているのであるが、シャチヴイとは地図に載る大きな地域を指すものではなく、単なる岩礁の呼称と筆者は受け取っている。

次にシャチヴイの港を考察してみたい。港という文言は、当時亜細亜誌に記載されているもので、日本では津・泊等の言葉を用いていたようである。してみれば極めて広範囲を指したものと考えられる。現代の様な各浦々の漁港を指したものではなく、一里沖合を含めた海域を港と書き留めたものと理解している。

以上シャチヴイの港の成立と、それに対する解釈の私見を述べさせてもらった。

紀諸に一八〇〇年代[illegible]景と考誌。シヤチヴイなる原語と港の状況の整合性、ウイリアム・アダムス手記等総(す)べてが漂着地と適合するかを判断し、多くの人達が納得いけばそれで良いと考えている。

アダムスの手記にいう、小舟を漕(こぎ)寄せ貨物を略奪された等の行為は、太田一吉の城下臼杵湾では到底出来得べき事件ではなかった。

リーフデ号漂着の驚きと共に、湾岸住民によって付けられたと思われる唐船碆なる地名が生まれた。それ以前の住民達の呼び名は立碆(タチバイ)と呼んでいたのではなかったか、現代のタチバイと唐船は並んでいる。土地の人達の言葉を全く無視することはできない。

略図によって、唐船・立碆の位置を確認すると、略(ほぼ)同一地点であることが分かる。

以上リーフデ号豊後漂着に対する地名的物件を挙げ、シヤチヴイ即ちタチバイと想定して不十分ながら説明した。私はこの佐伯湾奥部が、ウイリアム・アダムスの手記と亜細亜誌に適合するシヤチヴイの港と推定している。

佐伯史談村井論文　慶元イギリス書翰
オランダ船リーフデ号漂着地考　鎌浦洋和
岡田章雄著『三浦按針』・NHK録音

秋の県外一泊研修旅行
変更のお知らせ

恒例の県外一泊研修旅行については、前号で十月十五日・十六日実行とご案内しましたが、十月は台風シーズンのため、**十一月十二日(金)・十三日(土)**の両日に変更します。行き先等は変わりません。

- **申し込み**　小　野　**四六―〇四四五または**
　　五十川　四六―〇三六四まで
- **期　　日**　十一月五日まで
- **募集人員**　二十五名